

学級担任のまなざし 28

Okayama Prefectural Education Center

R2.7.15(Wed)

「教員の言葉」

運動場の方から、担任しているひろしくんの大きな声が聞こえてきます。休み時間に教室にいた私は、「どうしたのかな？」と思いつつ、玄関に向かいます。すると、ひろしくんが「あきらくんとは、もう、絶対に一緒に遊ばない!!」と言いながら、靴箱のところで上履きに履き替えています。

養護教諭も駆けつけ、「ひろしくん、一緒に保健室に行こうか。」と言って、ひろしくんを連れて行きました。私もついて行きました。

「ぼくが、ジャングルジムで遊んでいたら、あきらくんが来て…。」と、ひろしくんはその時の出来事を話します。とても腹立たしかったので、以前にされて嫌だったことも話し始めました。ひとしきり、心の中にあつた嫌な思いを話し終えました。

その養護教諭は、ひろしくんの気持ちを受け止めながら、しばらくやりとりをした後、こう言いました。「じゃあ、今度は、今まであきらくんにやさしくしてもらったときのことを話してみてる？」少しの沈黙の後、「この前、僕が運動場で転んで血が出たとき、一緒に保健室についてきてくれた。」「それから、ドッジボールに入れてくれた。」「それから、…。」と、次々に思い出した出来事を話し続けました。やがて、心なしか表情も和らぎ、声のトーンも落ち着いてきました。再び、少しやりとりした後、「さあ、もう一度、ジャングルジムに行ってきたら。」と言われて、ひろしくんは「うん!」とうなずきました。

子どもたちは、いろいろなトラブルに出会いながら大きく成長していくのだとつくづく思いました。そうしたトラブルを子ども自身が上手く乗り越える経験はとても大切で、そんなとき、教員としてどんな言葉で語りかけることが必要なのか考えさせられました。